

高齢化が進み、社会保障費が膨らんでいます。8月に法律が成立した「社会保障と税の一体改革」は、この問題の解決を探る取り組みです。ところで、なぜ社会保障が必要なのでしょうか。

不幸はいつ降りかかるかもしれません。病気やけがをしたり、失業したり、高齢になって生活資金に困ったり介添えが必要になったり。運よく避けられればそれに越

## ニュースを読み解く

# やさしい経済学

## 第3章 社会保障の考え方

1

慶應義塾大学教授 土居 文朗

したことではないですが、そんな事態に直面すると、金銭的な損失を被ることになります。

経済学では、ある確率で損失が生じると予想される事態を「リスク」と呼びます。個人が人生で直面するリスクを社会全体で分かち合うことで、これを和らげようとするのが社会保障です。緩和する

手段として保険の仕組みを使っているのです。保険はリスクに直面しそうな人が集まって、保険料を出し合い、実際に遭遇してしまった人には保険金を給付することで、金銭的損失を補います。不幸な事態に100%遭わないと予

## リスクを分かち合う

見える人がいれば保険は損なと思うでしょうが、大半の人は予見できないのでリスクに備え保険に入ろうとします。保険は大事な原則にのっとっています。一人ひとりがリスクに直面するかどうかはまちまちですが、多くの人が集まれば、確率がある一定の値になっていくという「大数の法則」です。社会保障は国民金員を加入させることで、大数の法則を働かせています。

当たりの保険料負担が軽くなり、給付が十分にできたりする利点があります。病気になった際の医療費を社会全体で分かち合うのが医療保険です。失業のリスクに対する対策は雇用保険、高齢になつて生活資金に困るリスクに対する年金保険、介添えがなければ生活ができないリスクには介護保険があります。対しては年金保険、介添えがどい・たけろう 70年生まれ。東京大博士(経済学)。専門は財政学、公共経済学